ゆっくりコンビと私の今後の雑談

ソドー鉄道員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆっくりコンビと私の今後の雑談

【Nコード】

N1499U

【作者名】

ソドー鉄道員

【あらすじ】

私（以下略）とゆっくりコンビの今後の小説連載についての雑談短編です。

ネタ切れ間際に書いたものですので、野暮な期待はしないでください。

ちよっただけ東方キャラが含まれていますので注意してください。

(前書き)

ゆっくりれいむ

「注意！この小説には、東方projectの二次創作が含まれています！キャラクターの設定やキャラ崩壊がございますことをご了承願います」

ゆっくりまりさ

「また、この小説はゆっくりが含まれており、作者も登場しています。

それが苦手な方や、アレルギーな方は、ブラウザの「戻る」ボタンを押して行ってね！！！」

ゆっくりれいむ

「そうでない方は……」

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ

『ゆっくりして行ってね！！！』

ゆっくりれいむ

「ハア、掃除だるいっす……」

幻想郷の最東端にある博麗神社で、（自称）楽園の素敵なお饅頭のゆっくりれいむは桜の花びらを箒で掃いていた。

いつもならば、ここの神社の巫女である博麗霊夢が掃除をしているのだが…当の本人はゆっくりれいむと交代でお茶を飲んで休憩している。

……と言うより、頭しかないゆっくりれいむがどうやって掃除しているかは突っ込んではいけない……この幻想郷では常識に囚われてはいけないのだ。

ゆっくりれいむ

「チキショー。人がせっかくようかんを食ったのに、こっちに掃除を任して……」

ゆっくりれいむはブツブツと文句を垂らしながら掃除をする。

彼女がこう言っているが、実際は霊夢がほとんど掃除をしているのである、つまりゆっくりれいむは何もしていない。

なので霊夢は、交代の際にこう言った。

回想

霊夢

『ゆっくり！、交代の時間よ』

ゆっくりれいむ

『えー？、めんどくさいよ。私はゆっくりしたい』

霊夢

『あんたね、居候してる身なんだから。少しは掃除の一つくらいはしなさいよ』

ゆっくりれいむ

『掃除すると、私のピチピチなお肌が乾燥しちゃうの。だから嫌よ』

霊夢

『妖怪饅頭が何を言うか!!。そしてあんたに拒否権は無い!、掃除しないなら…明日から御飯は抜きだからね!』

ゆっくりれいむ

『ちよっ……!、マジッすか!?!』

回想、終わり

……これがゆっくりれいむが掃除をしているワケだった。

「ご飯抜きと言われては、ゆっくりれいむも嫌々掃除をしたくなる。

掃除しても、面倒くさいし、とにかくゆっくりしたかった。

萃香に頼もうとしても、「まだ眠いから寝かせろ」と言う寝ぼけた返事が戻ってくるだけ、そして萃香はまたぐっすりと眠る。

どうにかならないかと悩んでいるうちに……狡賢い知恵が浮かんだ

ゆっくりれいむ

「そうだ!まりさも誘って、あの男の家に逃げるか」

そう思いつくと、ゆつくりれいむは霊夢が休憩している隙を見て、
箒を音もたたさずに置き……

一目散で相方のゆつくりまりさが白黒の魔法使いと一緒に住む魔
法の森へとすっ飛んで行った。

……そして、ゆつくりれいむが逃げ出したその一時間後に霊夢が
戻ってきた。

霊夢

「ゆつくりー、ちゃんと掃除やった？」

霊夢はそう言って辺りを見渡すと、賽銭箱に置いてある箒だけが
あって……ゆつくりれいむの姿は見当たらなかった。

彼女は賽銭箱の中を調べたり、縁の下を覗いたりもしたが……やは
りゆつくりれいむの姿は無い。

次第に、サボったことに気づき、眉をひそめた霊夢の額に青筋が
出た。

霊夢

「あ、あの饅頭……またサボったわね……（怒）」

毎度のことでありながら、ゆつくりれいむのサボり方には本当に
怒りを通り越してあきれれるほどである。

霊夢はため息をつく、仕方なしに箒をもって掃除しようとした
……。

ふと、霊夢が何かを思い出し、再び賽銭箱の中を確認すると、紙切れが入っていた。

霊夢

「…………手紙？」

賽銭箱からその手紙を取り出すと、霊夢は手紙の内容を読み始めた。

手紙に書かれていた内容は、こう書かれていた。

く私の偽者へく

ちよつと外の世界に出かけてくるわ。

掃除はあんた1人でやってね、あ、冷蔵庫に炒飯が入ってます。

ゆっくりチンして食べていってね!!!

追伸

あんたの分の炒飯は食べました。

萃香

「あつ、また霊夢が怒ってる」

そして霊夢の怒声で起き上がった幻想郷の小さな百鬼夜行が、酒を飲みながら眺めていた。

……所変わって、こちらは外の世界。

神社の掃除をサボったゆっくりれいむは、相方であるゆっくりまりさと共にある男の家にたどり着いた。

玄関の前でゆっくりれいむは、インターホンを押す前にまりさに声をかけた。

ゆっくりれいむ

「まりさ、お願いね」

ゆっくりまりさ

「いいですとも」

さて、この饅頭と黒大福は何をしようと言っのたろうか？。

私に（以下略）

「よし！トゲゾーさん来た！これで勝つるー！」

そしてこの家に住んでいる、小説を書き始めた私に（以下略）はマリ カート64をやっていた。

小説の続きはどうしたと思う読者の方々が居ると思うが、小説の続きはかなり考え込まないといけない。

だが、あんまり考え込むと大変な結果を招いたり、体を壊してしまうのでたまには息抜きも必要だ。

私に（以下略）

「あともうちよつとで1位だ、ここは集中…集中…」

丁度、行く先々の選手をアイテムで妨害し、1位にまで上り詰めてゴールを目指していた。

あともうちよつとでゴールと思いきや……………。

ピンポーン

インターホンの音が玄関から届いた。

私に（以下略）

「ん？、お客さんかな？」

音に気付いた彼は、ゲーム場面をポーズ場面にしてから玄関へと向かった。

長い廊下を渡り、玄関先まで行く、インターホンの音が何回も何回も響いているが……………、

これが彼の最大の悲劇になるとも知らずに……………。

玄関のドアノブを握り、ドアを開けると……………

私に（以下略）

「はい、どなたさま……」

ビィィィィィゴゴゴオオ！！！！

特大のレーザーが私に（以下略）の全体を注いだ、そりゃあもう特大に。

意識があるうちに玄関先をみると、そこにはゆっくりの顔が付いた八卦炉を構えて、マスタースパークを放った黒大福と……それを見てニヤニヤ笑う饅頭の姿が……。

ああ……私は死んだんだな……

そう思い、私の意識がどんどん薄れて行き……影も形も残らず消えゆくのだった……。

神は言っている、ここで死ぬ運命ではないと……

1分後……。

私に（以下略）プスプス……

「……で、今日は何の用で来たのですか？」

多少黒こげでアフロ頭になっているが、無事に生還した私に（以下略）は、ゆっくりれいむとゆっくまりさを家に入れ、

チヨコラーメンを御馳走しながら不機嫌そうにゆっくりコンビに質問する。

その元凶であるゆっくりコンビは、ラーメンを美味しくそうにズルズル食べ終わると、満足そうにその質問に答えた。

ゆっくりれいむ

「いやあ、あんた最近小説書き始めたでしょ？。それが聞きたくて来たのよ」

私に（以下略）

「じゃああのマスパは！？」

ゆっくりまりさ

「ああ、あいさつ代わりだぜ」

私に（以下略）

「あんなのがあいさつ代わりだったら死んでしまっわアア！！。つか小説書き始めたのを理由が来るか！？来るのかよ！？」

あいさつ代わりで死にかけたので、青筋を頭に浮かべながら、私に（以下略）は怒鳴った。

と言うより、マスタースパークを直撃で食らったこいつも生存してるのがすごい。

どうにもこの理不尽極まりないゆっくりコンビに頭を抱きかかえうなだれる私に（以下略）に、ラーメンのスープを飲みほしたゆっくりまりさは気にせず話を続けた。

ゆっくりまりさ

「それでな、そのことでれいむと話し合ったんだぜ。ここに来る前にな」

私に（以下略）

「なんで人の話を聞かないんだこの饅頭たちは…」（泣）

ゆっくりれいむ

「私たちの小説も書いてほしい…」と」

私に（以下略）

「ハア……まあいいですが、しかし何故いきなり？」

ゆっくりれいむ

「なんとなくよ」

私に（以下略）

「いやなんとなくじゃわかりませんよ！。なんか理由があるから書いてほしいのではないんですか？、無かったら書きませんよ」

ゆっくりまりさ

「チツ…うつせーな人間の分際で（小声）。お前、最近小説の更新しないからな、気を変えて私たちの小説を書いてみたらどうだ？」

私に（以下略）

「ぐぬぬ……」

反論しようとしても、正論であるために私に（以下略）は言い返せなかった。

しかし、いきなりあのマスパを喰らわせといて小説を書いてほしなど強欲のオーラがわき出てるのを感じる。

逆らいたいけど、逆らえない…杏、逆らったらマスパ位では済まない、ルーミアか紅魔館の食材にされてしまう恐れもある。

あるいは、かなりまずい一口餃子を無理やり食べさせられるのが

オチだ、それは絶対に逃れなければならない。

外見だけが霊夢と魔理沙に似ているが、相手は妖怪である。

ゆっくり達が食材にすると言ったら、本当にするのだ。

断つても命の保証が無く、反論しても命の保証が無い……悩むうちに私に（以下略）はため息をついて決心した。

私に（以下略）

「分かりました、いつになるか分かりませんが……ゆっくりさん達の小説を書きます」

何を言っても理不尽な行動をされるのを逃れるため、仕方なしにゆっくりコンビの要望を受け入れる。

ゆっくりれいむ

「おおおお！！マジか！？」

ゆっくりまりさ

「よく言った！それでこそ私に（以下略）だ！」

自分たちの小説を書く要望を受け入れてくれたことに喜ぶゆっくりコンビ。

喜びのあまり、どこからか出したのかトロツコに乗って暴走したり、とび跳ねたりする。

私に（以下略）

「あ……そうだ、ゆっくりさん達にこのことを話さねばと思いまし

たが…」

とはいうものの……喜びと興奮のあまりで話を聞かないゆっくりコンビには耳にも入らないだろうと考え付く私に（以下略）。

どうせこの2人は人の話を聞かないから、思い切ってこう答えた。バツサリと…。

私に（以下略）

「ゆっくりさん達の小説ってどんなタイトルにするんですか？、もう決めてありますか？」

彼がそう答えたとき…

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ

『……………えっ!?!』

饅頭と黒台福は固まり、外ではウグイスの鳴き声が響くのであった。

おわり

(後書き)

ゆっくりれいむ

「はい、と言うことで今後に新たな小説を連載していこうと思ひます」

ゆっくりまりさ

「新連載の小説は、トーマスではなく、私たちゆっくりがお送りする小説です」

ゆっくりれいむ

「小説のタイトルはこれだ！」

ゆっくりれいむとゆっくりまりさのThe クイズでしていいね！……！

ゆっくりれいむ

「この小説は言うなれば、クイズ形式の小説です。読者の皆様が参加して、感想欄かメッセージにその問題の答えを言うと言う、うちのバカ作者の考えからこうなりました」

ゆっくりまりさ

「いや、参加しなくてもクイズ番組を見ている気分で読んでも構いません」

ゆっくりれいむ

「いつ連載するかは作者次第。では、勝てば天国！負ければ地獄！ゆっくりれいむとゆっくりまりさのThe クイズでしていいね！……！」を……！

『ゆっくりねいむ・ゆっくりまじや
ゆっくり待っていつてね!!--!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1499u/>

ゆっくりコンビと私の今後の雑談

2011年10月8日15時10分発行